

インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

目次 contents

第40国際福祉機器展 H.C.R.2013 たくさんの来場者でにぎわった「目からウロコ展」(三好泉)	2
共用品推進機構、千代田区主催 「第11回福祉まつり」に初出展(星川安之)	4
「すみだ水族館」見学 ～すみだ流のおもてなしを～(金丸淳子)	5
台湾 金属工業研究発展センター／ 韓国、パッケージデザイン協会主催シンポジウム	6
山内繁氏、「第10回本間和夫文化賞」受賞／ 旅行に関する「良かった事」調査開始	7
ISO/TC173/SC7 総会とISO/TC173総会が開催 (山内繁、松岡光一)	8
随想 私と共用品第66回 10年間の工業標準化の動向と国際規格との推移(渡邊道彦)	9
(独)国立特別支援教育総合研究所にて、特別支援教育専門研 修 視覚障害教育専修プログラム講義実施 (森川美和)	10
<キーワードで考える共用品講座> 第78講 「障害者福祉と共用品」(その6：第3次障害者基本計画)(後藤芳一)	11
<事務局長だより> 仕事は、人に合わせることができる(星川安之) 共用品通信 奥付	12



第40回国際福祉機器展 H.C.R.2013

たくさんの来場者でにぎわった「目からウロコ」展

—国際福祉機器展主催者特別展示「目からウロコ」展に企画・実施協力—

9月18日（水）～20日（金）の3日間、東京・有明の東京ビックサイトで開かれた第40回国際福祉機器展（主催：全国社会福祉協議会/保健福祉広報協会）の主催者特別企画として、（公財）共用品推進機構は『高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー～生活に便利なグッズ、その知られざる歴史とノウハウ「目からウロコ展」～』の企画・監修を担当し、また会期中は展示説明にも協力した。展示コーナーは開場から最終日の閉展時間までたくさんの来場者で大変活気のある展示会となった。

今年で40回目の節目となる国際福祉機器展は、昨年より37社増の585社（国内526社、海外59社）が出展し、3日間通しての来場者は約12万人という福祉機器関係のビックイベントである。

本機構では、2009年から主催者特別企画「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー」の企画・実施に協力してきた。昨年度の「片手で使えるモノ」展も大きな関心をよび、たくさんの方々にご来場いただいた。

今年度は、さらに多くの人に高齢者・障害者支援製品の工夫やノウハウを知ってもらい、これらの製品を生活の中で生かしてもらえるようにテーマを「目からウロコ展」として主催者に協力し企画を進めた。

普段誰もが使っている身のまわりの日常生活製品の中にも、障害のある人や高齢者などの自立や介助を助ける工夫や配慮の歴史が詰まったモノが沢山ある。それらの開発・研究や工夫の背景を聞くと感心するモノが多い。今年は来場者にその工夫や背景を知らせ、また展示製品の体験を通して「目からウロコ」を落としてもらいたいとの思いである。

■「目からウロコ」展の構成

昨年度の倍の約150m²に広がった展示スペースを「触る」「見る」「聞く」「繋がる」「使う」の5つのコーナーに分け、導入部にテーマの趣旨パネルを掲載した。それぞれのコーナー壁面には説明パネルを表示した。展示台上には、製品と製品の説明カードを配置し、自由に体験で

きるように準備した。

展示に協力いただいた企業は57社・4団体、展示製品は、77点である。

各コーナーには以下のような展示パネルと以下に示す展示製品を展示してある。

「触る」：内容や表示が触ってわかるモノ/柏餅の味噌餡と小豆餡、点字表示のある食品類のビンなど、触覚記号のあるシャンプー容器など。

「見る」：音や声が見えるモノ：測り終わりを振





動で知らせる体温計、光で来客を知らせるダブル、透明マスクなど

「聞く」：表示や字を聞くことができるモノ：放送局名や番組表を音声で読み上げるテレビ、重さを声で教えてくれる秤など

「使う-1」：左右どちらの手でも使えるモノ：4隅にマークがあるので左利きでもわかりやすいトランプ、左右両方に注ぎ口がある鍋など

「使う-2」：片手でも使えるモノ：開いたままの状態を保持できる洗濯ハサミ、片手でも履きやすい靴など

「繋がる」：世界と繋がるモノ：触覚記号のあるシャンプー容器、意思疎通を行いやすくする支援ボードなど

■多くの来場者の声は

実際に生活で様々な不便さを感じられている方だけでなく、施設関係者や行政の方、企業の方など多くの方にご来場いただいた。

また若い学生さんがパネルや展示製品のメモ

を取りながら、熱心に一つひとつの製品を試していたのも目に付いた。

「あることがきっかけとして、急にものごとの真相や本質が分かるようになること（広辞苑）」とされる「目からウロコ」が落ちたかどうかはわからないが、会場からは「知らなかった」、「へ〜！そうなんだ」といった声があちこちで聞かれ、展示製品の開発背景や工夫の数々に納得していただけたようであった。

会期終了後、展示に協力いただいた企業からは、「先日、〇〇県から わざわざ左きき用の△△を見たいというお客様がいらっしゃいましてビックリしていたところでございます」とか、「おかげさまで、早速、□□協会の方よりお問合せを頂きました」などうれしい反響も寄せられている。

アクセシブルデザインにかかわっている方々には「当たり前」の情報や商品でも、まだまだ「より多くの人が使える商品、使いやすい商品」の情報や設計の工夫などが知られていない現状があると改めて感じた次第である。

最後に、展示にご協力いただいた各企業、主催者の（一財）保健福祉広報協会、ご支援いただいた（公財）テクノエイド協会、（公社）日本包装技術協会、日本化粧品工業連合会の皆様に感謝いたします。

みよし いずみ
(三好 泉)



共用推進機構、千代田区主催「第11回福祉まつり」に初出展

共用品推進機構は、10月12日（土）千代田区主催の「第11回福祉まつり」に参加した。

1コマ（約3メートル×3メートル）の中で、共用品クイズを出題。イベント開始早々から参加者が後をたたず、大盛況の内に同ブースは終了した。

きっかけ

共用品推進機構では、今年度より事業計画（案）を作る前に、理事、評議員、監事で、次年度の事業計画をたてるにあたって、意見交換を行っている。その時に柿内健介理事より、地域への浸透が課題ではないかとの意見があった。経営者と地元小学校のPTA会長という二つの顔を持つ柿内さんは、所在地である千代田区との連携強化のため、石川雅己千代田区長とのつながりを作ってくれた。その結果、千代田区長から今回のイベントへ出展を提案頂き、参加の運びとなった。

クイズで学ぶ

今まで多くのイベントや展示会に参加したり主催してきたりしてきたが、「まつり」と名のつくイベントへの参加経験がない。一抹どころか多くの不安が、10月12日の本番に近づくにつれ増してきた。障害の有無、年齢の高低にかかわらず、共に使いやすい製品を、ましてやサービスを、休日に参加する誰もが「楽しみ」を求めてくる人たちに、いつも通りの展示を行うことで興味を持ってもらえるのだろうか？という不安である。

考えた末「クイズ形式にするのはどうだろうか？」と思いついたのが、イベントの1週間前。「クイズ形式であれば、正解者には景品が、必須ということになり、最初に共遊玩具発祥の会社であるタカラトミーの社長室に相談したところ、快諾。他にも数名にお願いし300以上の景品を提供いただいた。

景品がそろった段階で、クイズの作成は事務局の金丸 淳子が担当。デザインは機構のパンフレットなどを作ってもらっている小松昌樹氏に、3日前に無理を言ってお願いしたところ、クイズのゆるキャラで「モヤモヤ君」なるキャラクターまで作成してくれ当日を迎えた。

保護者の声、「知らなかった！」連発

まつり当日。この日の気温は10月というのに真夏のように30度越え。来場者の体調も気になりながら、シャンプー容器、牛乳パック、左利きの人も使いやすいトランプ等をクイズとして出題。共用品と一緒にしている説明を読めば回答できるようになっているが、子供たちの多くは学校でも習ったことがあり、説明を見なくてもスムーズに答えられた。しかし多くの保護者からは、「知らなかった！」との声が多く聞かれた。

また、今回このコーナーで目玉となったのは、15センチ四方の立方体の箱の側面に穴をあけ、そこから手を入れ、中に入っているアニア（動物のミニチュア）を当てるというゲームだ。アニアは、もともとは目の不自由な人を主な対象として作られたわけではない。しかし目の不自由な人たちは、本物の動く動物を触るのは困難であるため、同社の商品は目の不自由な子供だけでなく大人も、アニアを触ればその動物が何か分かる（85号P9参照）。このゲームが気に入った子供は何度もやってきて、最後にはすべてのアニアが触って分かるまでになり、満足げに会場を後にした。

千代田区主催のイベントは次回、12月の障害者週間への参加である。より多くの人に「共用品」を更に伝えられたらと、今から意気込んで（石川安之）



「すみだ水族館」見学

～すみだ流のおもてなしを～

昨年の5月22日に開業したすみだ水族館（東京都墨田区）。共用品推進機構は、開業前にスタッフの方々に向けたサービス研修に協力しており、今回はオープンから1年半が過ぎたすみだ水族館の様子を見学した。

参加したのは、研修の講師を務めてくださった国立障害者リハビリテーションセンター小田^{おだ}じま^{あきら}氏、^はが^{ゆう}こ^こ芳賀優子氏（弱視）、^{にしどめ}ます^{すみ}西留満寿美氏（ろう）、^{かみやま}上山のり子氏（車いす使用）、そして手話通訳者2名の方々。それに共用品推進機構から2名が加わり、館内を見学した。

今回は、障害のある方は3名とも一人で見学していただき、見学のあとの意見交換会で感想などをいただくことにした。手話通訳の方2名をはじめ、障害のないメンバーは遠くから見守りながら、スタッフの方のサポートや対応を見せていただいた。見学のスタートはチケット売り場。それぞれがチケットを購入するところから始めた。障害者割引があること、割引料金の内容説明もしなければならなかったが、スタッフは、普段障害のある人にチケットを販売するときと同じように接した。



すみだ水族館は順路がなく自由に見学でき、館内で飲食しながら、ゆっくりペンギンたちを眺めたりもできる滞在型の施設。軽食を販売する店、館の出口にはギフトショップもある。全員が何か必ず飲食し、おみやげも購入することにして、みなそれぞれの場所で別々にサービス

を受けた。

見学を終えた後に水族館スタッフ15名を交え、意見交換会を行った。まず館内を見学したときの、スタッフの人たちの対応について気づいたことなどを述べた。



西留氏からは、少しでも手話ができる方がいいといいし、筆談のためのメモ用紙は準備しておいてほしいといった要望が出た。芳賀氏からは、スタッフの気軽な接客に好感がもててよかったといったコメントも聞かれた。上山氏も水族館に下町の雰囲気を感じると、館内の心地よさを語った。

スタッフの質問から、日々の業務の中で困っている事も分かってきた。お客様が「障害者割引を受けたいが、手帳をは見せたくない」とおっしゃる場合はどうしたらよいか、筆談の際のメモ書きはスタッフ側で処分してもよいか、といった自分では判断しかねる事柄もあり、館としてのルール作りで解決できることもあった。

障害の有無に関わらず、お客様に水族館を楽しんでいただくためには、スタッフの人たちも難しく考えずに、障害のある人となない人ではサービスの提供方法や情報の伝え方が少し異なるだけという気持ちで、「すみだ水族館流のおもてなし」で、お客様への声掛けを続けてはどうか。余計なお世話をしてしまったと落胆しないことも、次へのステップアップにつながっていくだろう。

かなまるじゅんこ
(金丸 淳子)

台湾金属工業研究發展センター

共用品・福祉用具の標準化並びに普及事業推進

■台湾との交流の経緯

遡ること10年、日本と台湾とを結ぶ交流協会からの依頼で、日本で実践している共用品及び共用サービスについて台湾で話す機会があった。政府の人、企業の人、そして学生が数多く参加してくれたそのシンポジウムはその後、関係する業界団体にも共用品に関心をもってもらうきっかけとなった。

具体的には、台湾当局、業界団体の方々が、何度も日本を訪問され、台湾で共用品の普及を進めていくにはどのようなやり方があるかのヒントを持っていかれた。

その間、何度か台湾を訪問させていただき、台湾の製造企業での取り組み、流通の状況なども教えていただいた。大同（タートン）公司という会社が、半世紀以上、同じ型の炊飯器を作り続け、既に1400万台販売していることには驚いた。

更に、この炊飯器はボタン一つ、しかも一つの指で軽く押すだけでお米を「炊く」だけでなく、「蒸す」、「煮る」、「焼く」など、さまざまな料理ができる。まさに共用品そのものである。

■違いを知り、互いに学びあう

10年たった今年の9月、標準化を進める台湾当局のメンバーと、さまざまな業界を統括する金属工業研究發展センターの人たちが、来日した。目的は、高齢者・障害ある人たちが使いやすい製品の普及を、2014年1月から本格的に始めることへの報告と共に、今後の更なる協力関係を築くことの確認のためであった。日本が提案し国際規格になったテーマに関しては、台湾の規格として制定する準備が既になされているとのこと。更に、台湾では認証制度にも取り組むべく研究がなされている。互いの良さを持ち寄り、更なる発展の10年にしていけたらと思っている。

韓国、パッケージデザイン協会主催シンポジウム

韓国から学ぶ

■共用品の講演会

11月2日、韓国パッケージデザイン協会からの依頼で、韓国テグ市のケミョン大学で行われた国際シンポジウムで、共用品についての講演を行った。パッケージデザインと言う名称の協会ではあるが、現在は幅広い分野のデザインを扱っている協会である。

「パーソナルアイデンティティ」に関する発表では、韓国の現大統領の服装、顔の表情等を取りあげ、場面ごとでどのような印象を持たれているかを分析、その他には、文字に関する研究、広告デザインに関する研究など、興味深いものが多かった。

■統合教育をしている大学訪問

今回の訪韓では、障害のある人とない人が共に学ぶ大学を訪問することもできた。韓国国立

福祉大学には500名の生徒のうち150名が障害のある学生。学内を見学していると、手話で会話をしている学生、車いすを使用している学生に数多く出会った。

この大学でも学生100名に対し、共用品の講座を行ったところ、手話、要約筆記の情報保障付きの講座となり、これが普通の授業の形態とのことであった。

■コンビニでの共用品

コンビニでは、点字付きの韓国製シャンプー・リンス、そして菓の箱を発見した。更に、帰りの金浦空港のアシアナ航空のカウンターでは、耳の不自由な人や言語の異なる人がコミュニケーションを絵によって行えるボードも見つけることができた。訪韓は20回ほどであるが、行く度に多くの学びがある。

ほしかわやすゆき
(星川安之)

山内繁氏、「第10回本間一夫文化賞」受賞 視覚障害者の利便性、日本工業規格制定に尽力



■第10回本間一夫賞

社会福祉法人日本点字図書館は、視覚障害者の文化向上に貢献した個人・団体に贈る本間一夫文化賞第10回受賞者に、点字表示などの規格化に尽力された、元国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所長、現 特定非営利活動法人支援技術開発機構 理事長の山内繁氏に決定した。

■山内繁氏

山内氏は、東京大学工学部から、国立障害者リハビリテーションセンター研究所に勤務され、平成4年から17年間、同センターの研究所長として日本の福祉機器の発展に多大なる貢献をしてこられた。

平成10年から日本工業規格（JIS）を統括する日本工業標準調査会標準部会に委員として参加し、平成18年から24年まで、高齢者・障害者

支援専門委員会で委員長を務められた。山内氏が委員長になってから、我が国における視覚障害者関連の規格の整備が進み、視覚障害者が利用しやすい環境が整ってきている。

■アクセシブルデザイン

山内氏は、共用品推進機構の多くの委員会でもご指導をいただいている。家電製品のスイッチ部のON-OFF等に凸点および凸バーを表示して視覚障害者の利用を可能にするためのJISの国際標準化をはじめ、ISO/IECガイド71の改定作業、そして規格を作る際の原点でもある当事者参加を可能にする「アクセシブルミーティング（みんなの会議）」の制定などである。

■表彰式

2013年11月9日（土）には、日本点字図書館で開催する「点字図書館オープンオフィス」にて、表彰式と記念講演が行われた。

旅行に関する「良かった事」調査開始

～良かった思い出から次のステップを見つけること～

共用品推進機構では、これまでに多くの障害者団体にご協力いただき、日常生活における不便さ調査を、数多く行ってきた。

調査により明らかになった不便さは、報告書にしてまとめ、多くの関係企業・業界団体に配布したこともあり、より多くの人が使えらる製品が増えてきている。これらの多くは、日本工業規格（JIS）となり、更に日本発の国際規格にもなっている。

「不便さ調査」から始まったこの一連の流れは、今まで不足していた部分を補うことには大変有効だった。しかし、更に使い勝手の良い製品やサービスを作りだしていくためには、不便さを指摘するだけでなく、「良いモノ」や「良いコト」の情報を収集し整理分析等を行い、利用者及び提供者で情報を共有することがその

突破口になると考えた。

今回、2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定したことを受け、複数の異なる障害者団体、高齢者機関、並びに関係業界、関係省庁の方々と相談し「旅行」をテーマに、「良かったこと調査」を行うことにした。

今回の「旅行」というテーマでは、①交通、②宿泊、③食事、④その他（観光等）の四つの場面を人的対応、施設・設備機器に分け、それぞれの場面で良かった事を伺うことにした。回答いただいた調査結果は、関係する機関に広く提供し、全ての人が住みやすい社会の一助になればと考えている。

*本事業は、日本児童教育振興財団の助成事業で行っています。

ISO/TC173/SC7 総会とISO/TC173総会が 開催

—ISO（国際標準化機構）/TC173（福祉用具の専門委員会）総会とISO/TC173/SC7（アクセシブルデザイン分科委員会）総会—

ISO（国際標準化機構）/TC（専門委員会）173はISOに設立されたTCであり、「障害者のための福祉用具」を担当している。

そこに属するのはSC1（車いす）やSC2（分類と専門用語）等のSC（分科委員会）やWG1（歩行のための福祉用具）等のWG（作業委員会）がある。

ISO/TC173/SC7はISO/TC173に属するSCの一つであり、「アクセシブルデザイン」を担当しており、そこに属するのはWG1（触覚情報のアクセシブルデザイン）等のWGであり、国際規格を作成している。

TCとSCの総会はほぼ1年半ごとに開催され、進捗状況の確認、新たな提案事項の検討、情報交換等を行うことになっている。

今回、ISO/TC173/SC7の第3回総会が2013年10月23日にドイツのベルリンで開催された。



ISO/TC173/SC7第3回総会

会議にはデンマーク、スウェーデン、韓国、日本の委員等7名が参加し、幹事、WGの報告が行われ承認された。更に現在検討中である「アクセシブルデザインの認証制度」について

説明したところ、大変好意的な反応を得ることができた。

ISO/TC173/SC7の総会に引き続き、ISO/TC173の第16回総会が10月24、25日の二日間にわたって開催された。会議にはスウェーデン、デンマーク、ブラジル、フランス、ドイツ、イタリア、日本、ケニヤ、オーストラリア、韓国の委員の他、ISO中央事務局、ANEC（欧州標準化消費者の声）、CEN/CENELEC（欧州標準化委員会／欧州電気標準化委員会）の代表を含め、合計27名が参加した。



ISO/TC173第16回総会

会議では幹事、WGとSCの報告が行われ、SC1（車いす）から「車いす使用者が参加する会議を主催するためのガイド」を検討中であるとの発表があった。出席したメンバーからSC7が開発した「アクセシブルミーティング」の規格が大変有用であるとの指摘があり、出席者全員がこの規格の有用性を理解することとなった。またISO/IECガイド71の重要性もメンバー全体で共有された。

やまうちしげる まつおかこういち
(山内 繁、松岡光一)

10年間の工業標準化の動向と国際規格との推移



一般財団法人日本規格協会 標準化推進室
わたなべ みちひこ
渡邊 道彦

これまで7年半の間、消費生活用製品の日本工業規格（JIS）や高齢者・障害者支援の規格の業務に携わることができました。数多くの専門家の先生方、経済産業省の専門官、共用品推進機構の皆様、日本福祉用具・生活支援用具協会並びにテクノエイド協会の皆様方など多くの方々のご指導の賜物と感謝に堪えません。

消費者の保護、高齢者・障害者支援などの社会ニーズが近年に高く高い要望がある中でJISの原案を確実に開発し、計画どおりに制定・改正を図ることが大変重要なこととなっています。

アクセシブルデザインが産業界等で協調され、JISの制定・改正の取り組みが加速され普及されることが予想されます。これらの観点から、日本の設計技術の規格やデザイン規格が世界に普及するためにもJISを国際規格（ISO）へ提案し、積極的に取り組み推進することが重要で、着実にその実績が積み重ねられていることは関係団体様のご努力の賜物と思っております。

さて、10年間のJIS及びISO規格の推移・動向について、次に記述いたします。

表1は、高齢者・障害者配慮設計指針の規格及び福祉用具規格の10年間の推移を表しています。まず、高齢者・障害者配慮設計指針の規格では、2004年には、JIS S 0011 “…消費生活製品の凸記号製品”を始め10規格でした。それが10年後の2013年には、37規格と約4倍に増加しました。その分類も①基本規格、②視覚的配慮、③触覚的配慮、④包装・容器、⑤消費生活製品、⑥施設・設備、⑦情報通信、⑧コミュニケーション、⑨その他と内容が様変わりしています。一方、福祉用具の規格では、2004年にJIS T 0101 “福祉関連用語”を始め39規格でしたが、2013年には、約1.5倍の59規格が制定されています。10年後の分類では、①用語、②義足、③義手、④装具、⑤車いす・つえ、⑥移動機器、

⑦ベッド・関連機器、⑧排泄用具、⑨浴槽用具、⑩触覚障害機器、⑪リスクマネジメントとその内容も変更されています。

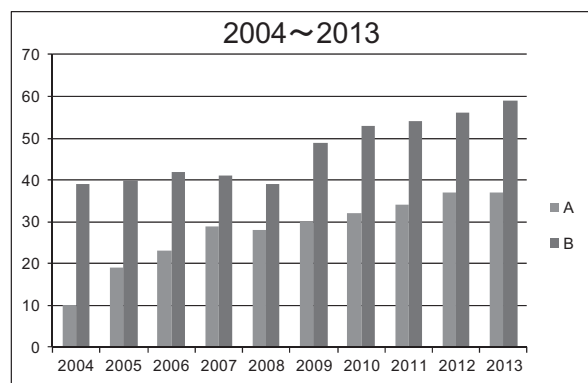
ISO規格の動向を見てみますと、TC122包装、TC168義肢及び装具、TC173福祉用具などで、2004年には77規格が10年後の2013年には、108規格と約1.4倍に増加している現状です。

日本のJISを国際規格化として提案し、普及している現状をみますと、JIS S 0013 “高齢者・障害者配慮設計指針－消費生活製品の報知音”がISO 24500として制定されたのを始めとして、現在では提案中及び準備中のJISは、JIS T 0902音案内、JIS S 0026トイレ、JIS T 0922触知案内図、JIS T 0103コミュニケーションボード、JIS T 0921点字表示及びJIS S 0042アクセシブルミーティングなど13、世界への発信を続けています。日本にとって高齢者・障害者支援は、長期的な視野と常に新鮮な視点で捉えてゆく必要があると思います。JIS及びISO規格が便利に利用・活用され発展することを今後とも期待いたします。

表1—高齢者・障害者配慮設計指針規格の推移

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
A	10	19	23	29	28	30	32	34	37	37
B	39	40	42	41	39	49	53	54	56	59

A : 高齢者・障害者支援規格の推移
B : 福祉用具規格の推移



(独)国立特別支援教育総合研究所にて、特別支援教育専門研修 視覚障害教育専修プログラム講義実施

～国立特別支援教育総合研究所での講義、約20年継続～

国立特別支援教育総合研究所（神奈川県横須賀市）（以下「特総研」）は、我が国における障害のある子どもの教育の充実・発展に寄与するため、昭和46年に文部省直轄の研究所として設置され、平成13年に独立行政法人となった。

その創立以来、40年余りの歴史の中で、障害のある子どもの教育に関する実地的・総合的な研究活動を行うとともに、それを核として、研修事業や教育相談事業、情報普及活動等を一体的に実施するなど、幅広い事業や活動を展開している。

■特別支援教育専門研修

特総研が実施しているプログラムは数多くあるが、そのうちの一つである「特別支援教育専門研修」において、毎年弊機構の星川安之と森川美和が講義を行っている。

このプログラムは、障害のある幼児児童生徒の教育を担当する教職員に対し、専門的知識及び技能を深めてもらうための必要な研修を行い、その指導力の一層の向上を図り、今後の各都道府県等における指導者としての資質を高めることを目的としているものである。

本年度の講義の前半では共用品の配慮や標準化についての説明を行い、中盤には「平成22年度視覚障害者不便さ調査成果報告書（共用品推進機構発行H23/8）」、「障害者の食生活調査報告書、（公財）すこやか食生活協会発行（H25/10）」等の結果とリンクさせながら、実際の共用品の工夫に触れたりする講義を展開。後半は、13名の先生方が3グループに分かれ、旅行代理店の社員となって、視覚障害のある人達が楽しめる旅行を企画・提案するワークショップを行った。

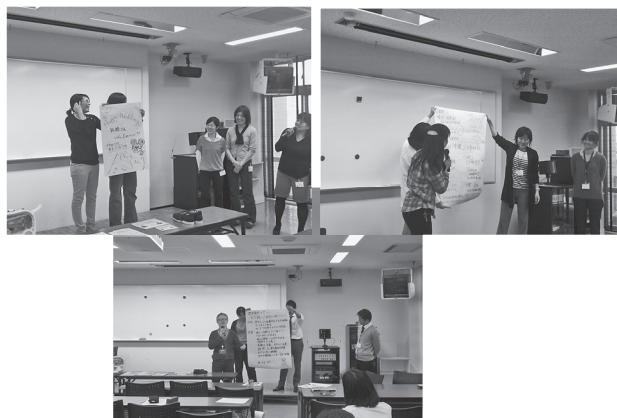
■誰もが楽しめる企画

さすがに視覚障害教育のプロだけあり3グ

ループの企画は機知に富み、視覚に障害のある人が楽しめる内容であると同時に、視覚に障害のない人達にとっても魅力的な内容であった。

視覚に障害のある新婚カップルが沖縄から首都圏（東京、テーマパーク、横浜等）をバス移動で楽しむ内容では、説明を聞くだけでワクワクするようなサービスが提供されたり、首都圏から沖縄の旅を楽しむ企画では、視覚に障害のある人達がダイビングに挑戦したりする。海の深さや気持ち良さを知ると同時に、イルカと遊泳できたり、文化体験としてエイサーや三線、シーサーの絵付け、琉球ガラス体験が選べたりする。

歴史体験ツアーの企画では障害のある人はもちろん、歴史好きの人も楽しめる内容で、興味があってもなかなか実感しにくいイメージのバリアを取り除くための内容が盛りだくさん。宿泊場所は「城内」。バス・トイレ付の部屋完備。移動はカゴで、殿・姫体験として着物を着たり、困ったことは家来にお任せできたりするツアー。



（プレゼンテーションする先生方）

実際に実現可能なツアーから夢のようなツアーまであるが、障害のあるなしに関わらず一緒に旅を楽しむ内容が増えてくることを期待しつつ、現場の先生方とのコミュニケーションが明日のアイデアを生むことを実感できる講義であった。

（森川美和）

■仕事は、人に合わせる事ができる

星川 安之



事務局長
だより

■京丸園株式会社

浜松市にある農家、京丸園は株式会社である。社長の鈴木厚志さんの講演を、静岡県主催のシンポジウムで拝聴する機会があった。実践が伴った考え方、そして話術に引き込まれた。

京丸園の社員数は67名、18才から82才までと幅広い。みつば、芽ねぎ、ちんげんさいをオリジナルの手法で育てている水耕部、水菜、ごぼう、さつまいも、京丸こしひかりを無農薬あいがも農法の土耕部、そして全国の80%の「芽ねぎ」の生産を行っている心耕部の3部分に分かれている。

■心耕部

一風変わった部署には現在、障害のある社員が21名働いている。

きっかけは、「うちの学校の生徒をやとってもらえないか？」と養護学校の先生が京丸園を訪ねてきたことから始まる。鈴木社長はそれまで、障害のある人との接点がなかったこともあり、何と言って断ろうかと考えた末、芽ねぎの栽培の過程を先生に見せることにした。横25センチ、高さ、奥行き共に2センチの横長のスポンジに20本ほど植わっている芽ねぎを、スポンジごと移しかえる作業は、スポンジの底の部分を手で7～8回抑えながら新たな場所におさめるという職人技が必要な作業である。

「これはうちの生徒には無理ですな・・・」の言葉を残して帰っていった先生が、再度京丸園を訪れたのは1週間後。下敷きをうちのわのように使いながら、「これ、使えませんか？」と、先生はその下敷きを使って、先

週見せられた職人が7～8回手を動かして行う作業を持ってきた下敷きを使い、1回でやってのけたのである。

この時の驚きが、人が仕事に合わせるのではなく、仕事が人に合わせる事ができることを学ぶきっかけになったと鈴木社長は言う。これが障害のある人を雇用するはじまりとなり、毎年1名採用することとし、毎年新しい仕事の仕方が生まれている。

■結果、無農薬に

その後新人が入社したとき、なかなかその人に仕事を合わせる事ができないこともあった。どうやればを検討する間、芽ねぎの水耕栽培しているビニールハウスの掃除を依頼した。ゆっくりだが丁寧な掃除を暫く続けたある日、鈴木社長は別の社員から「社長、最近虫が出ません」という報告を受けた。なぜ、虫がいなくなったかを分析すると彼がやってくれている「掃除」にあることが分かった。いつも清潔にすることで、虫がわかかなかったのである。虫がわかかなければ農薬はいらない。どうしたら無農薬でおいしい野菜が作れるかの答えを、障害のある社員が導き出したのである。

先日、浜松を訪問し、鈴木厚志社長、奥様の鈴木緑さん、そして心耕部の人たちに会うことができた。1997年から始まった障害のある人との「共働」のための創意工夫、その継続を、目の当たりにすると共に笑顔の絶えない京丸園という空間に、今まで味わったことのない感動を覚えた。それにしても、お土産にいただいた芽ねぎのおいしさは、更に格別！だった。

共用品通信

【イベント】

【9月】

第40回国際福祉機器展（「目からウロコ展」）（18～20日）

【10月】

千代田福祉まつり（「目からウロコクイズ」で出展）（12日）

【会議】

【9月】

第1回TC159 国内委員会（3日）

第1回AAL 検討委員会（24日）

【10月】

第5回IEC/SG5/AAL会議（8、9日）

第1回旅行調査委員会（11日）

第3回JIS 誘導用ブロック委員会（18日）

第1回看護ニース検討委員会（25日）

【外部主催会議】

【9月】

第46回JISC消費生活技術委員会（9日、金丸）

第18回規格委員会（11日、金丸）

【10月】

第4回規格調整分科会（22日、金丸）

【講義・講演】

【9月】

NPO法人高齢社会の住まいをつくる会 講義（星川、4日）

静岡県にて講演（星川、25日）

【10月】

神奈川県立横須賀大津高等学校の3年生に授業（森川、1日）

内閣府 障害者週間セミナー（森川、7日）

家電製品協会で講演会（星川、9日）

昭島市立拝島第三小学校で共用品授業（森川、10日）

千代田区立九段小学校で共用品授業（森川、23日）

八王子市立山田小学校で共用授業（森川、25日）

【インターンシップ】

【9月】

跡見学園女子大学学生2名（9～20日）

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第87号

2013（平成25）年11月25日発行

"Incl." vol.13 no.87

©The Accessible Design Foundation of Japan

(The Kyoyo-Hin Foundation), 2013

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部1000円

（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (公財)共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人
事務局

鴨志田厚子
星川 安之
森川 美和
金丸 淳子
水野由紀子
松岡 光一
三好 泉
田窪 友和

執筆・協力 後藤 芳一
(五十音順) 関戸 菜美
中野奈津美
渡邊 道彦

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
サンパトナース(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。